日本文学全集 28

下村湖人

次郎物語（上）

河出書房

日本文学全集 28 下村湖人

© 1973

責任編集
武者小路実篤　川端康成
石坂洋次郎　山本健吉
瀬沼茂樹

昭和42年6月20日　初版発行
昭和48年10月30日　9版発行

著　　者　下村湖人
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装　　幀　原　弘
印　　刷・中央精版印刷株式会社
製　　本・岸田製本紙工業株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京（292）大代表 3711
振替口座　東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目次

第一部……五
第二部……一七四
第三部……三九
年譜　四五一
文学入門　福田清人　四七七
口絵　榎戸庄衛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

次郎物語

(上)

第一部

一　お猿さん

「癪にさわるったら、ありゃしない。」と、乳母のお浜が、台所の上り框に腰をかけながら言う。
「全くさ、いくら気がきついたって、奥さんもあんまりだよ。まるで人情というものをふみつけにしているんだもの。」と、竈の前で、あばた面をほてらしながら、お糸婆さんが、能弁にあいづちをうつ。
「お前たち、何を言っているんだよ。」と、その時、台所と茶の間を仕切る障子が、がらりと開いて、お民のかん高い声が、鋭く二人の耳をうつ。
お糸婆さんは、そ知らぬ顔をする。お浜は、どうせやけ糞だ、といったように、まともにお民の顔を見返す。見返されて、お民はいよいよきっとなる。
「お浜、あたしあれほど事をわけて言っているのに、お前まだわからないのかい。恭一は何と言っても惣領なんだからね。どうせあの子を、そういつまでも、お前の家に預けとくわけにはいかないじゃないか。」
「そんなこと、もうわかっていますわ、どうせご無理ごもっともでしょうからね。」
「お前、何ということをお言いだい、私に向かって。……お前それですむと思うの。」
「すむかすまないか、わかりませんわ、まるで欺しうちにあったんですもの。」
「欺しうちだって。」
「そうじゃございませんか。恭さんをちょっと連れて来いとおっしゃるから、つれて上ると、すぐにお祖母さんに連れ出さしておいて、そのあとで、こんなお話なんですもの。」
「それで、お前すねたというのだね。」
「すねたくもなろうじゃありませんか。私にも人情っていうものがございますからね。」
「すると、恭一の代りに、次郎を預かるのは、どうしても嫌だとお言いなのかい。」
お浜はそっぽを向いて黙りこむ。
「何というわからずやだろうね。私に乳がないばっかりにこうして頼んでいるのに、やさしく言えばつけ上って。……嫌なら嫌でいいよ、もうお前にはどの子も頼まないから。その代りこの家とはこれっきり縁を切るから、そうお思い。飯米に困るなんてまた泣きついて来た

って知らないよ、恭一にだって、これからはどんな事があっても逢わせるこっちゃない。」
お民は、そう言ってぴしゃりと障子をしめた。
「奥さん、そりゃあんまりです。あんまりです。」
お浜はしめられた障子のそとでわめき立てた。
「何があんまりだよ。」
「あんまりですわ。やっと恭一さんを一年あまりもお育てしたところを、だしぬけに、今度の赤ちゃんのような、あんな……」
「あんな、何だえ。」と、また障子ががらりと開く。
「……」
「はっきりお言い。」
「まあまあ、奥さん、わたしからお浜どんにはよく言って聞かせましょうで……」と、お糸婆さんが、やっとなだめにかかる。
「言って聞かせるもないもんだよ。年寄のくせに、お浜にあいづちばかりうっていてさ。」
「へへへへ。」お糸婆さんは、お歯黒のはげた歯をむき出して、変な笑いかたをする。
その時、奥の方から赤ん坊の泣き声がきこえた。お民は障子をしめながら、二人をぐっと睨めつけておいて、その方に立って行く。
「どうせお前さんの思うとおりにゃなりっこないよ。あきらめたらどうだね。」と、お糸婆さんはお浜に寄りそって小声で言った。
「やっぱり今度の赤ちゃんを預かるのさ。飯米のこともあるしね。」
「あたしゃ、飯米のことなんか、どうだっていい気がするんだよ。」
「そりゃ、お前さんの今の気持はそうだろうともさ。だけど飯米もふいになるし、恭さんにもこれから逢えないとなりゃ……」
「ほんとうに逢わせない気だろうかね。」
「そりゃ、あの奥さんのことだもの。……お前さんも随分勝気だが、奥さんにあっちゃ叶いっこないよ。こうと決めたら、てこでも動くこっちゃないからね。」
「そのうちには、恭さんもわたしたちを忘れてしまうだろうね。」
「そりゃ、何といってもね……だから、やっぱり今のうちに、お前さんの方で折れた方が何かと工合がいいんだよ。」
「でも、恭さんの代りにあんな猿みたいな子を預かるのかと思うと……」
「そんなこと言うのは、およし。聞えたらどうする。」
「だって、本当だろう。お前さん、そうは思わないかい。」

「それほどにも思わないよ。そりゃ恭さんとはくらべものにならないけれど。」
「恭さんは、そりゃ生まれた時から品があったよ。」
「今度の赤ちゃんだって、育てていりゃ、そのうちかわいくなるさ。」
「あんなお猿さんみたいな顔でもかい。」
「およしったら。ほんとに聞えたら知らないよ。」
「聞えたら、聞えたでかまわないさ。」
「でも、それじゃ、何もかも駄目になるじゃないかね。第一、恭さんにも一生逢えなくなるよ。それでいいのかい。」
「ああ、ああ、癪でも、やっぱり預かることにしようかね。」
「そうおし、飯米のこともあるしね。」
「また飯米のことかい。よしておくれよ。あたしゃ、恭さんがかわいいばっかりに、あんな猿みたいな赤ちゃんでも、預かってみようというんだよ。」
「おやおや、えらいご奮発だね。でも、預かる気になってくれて、わたしも奥さんに申訳が立つというわけさ、……どうれ、また気が変らないうちに、奥さんに知らしてあげようか。」
　お糸婆さんは、にたにた笑いながら奥に行った。そして、お民にさんざん噛みつかれながらも、ともかくうまく話をまとめた。
　そこで次郎はその日から、恭一に代って、お浜の家に里子に行くことになったわけなのである。
　だが、お浜が次郎をいつまでもお猿さん扱いにして嫌っていたかというと、そうではない。三、四カ月もたつと、彼女の愛情はもう、すっかり恭一から次郎の方へ移ってしまっていたのである。
　お民は、次郎が次男坊なためか、或いはお浜が言ったように、実際猿みたいな顔をしていたためなのか、恭一を預けていた頃にくらべて何かにつけ冷淡だった。お浜にはそれが癪だった。そして、それがかえって彼女の次郎に対する愛着を増す原因のひとつでもあったのである。
　ある日、お浜は次郎の大きくなったのを、お民に見せたいと思って、しばらくぶりでやって来た。するといきなりこんな会話が始まった。
お民――「おかげで、お猿さんも随分大きくなったわね。」
お浜――「まあ、お猿さんですって？」
お民――「そういっちゃ、いけなかったのかい。」
お浜――「だって、ご自分のお子様じゃございませんか。」
お民――「でも、お猿さんって言うのは、お前がつけて

くれた名だっていうじゃないの。ちゃんと婆さんに聞いて知っているのよ。」

お浜――「あの時は、あの時ですわ。いつまでもそんな……」

お民――「少しは人間らしい顔に見えてきたと、お言いなのかい。」

お浜――「奥さんたら、わたし、くやしいっ。」

お民――「おや、泣いてるの、ついからかってみたくなったのだよ。すまなかったわね。」

お浜――「からかうのも、事によりますわ。奥さんがそんな気持でしたら、私にも考えがあります。」

お浜は、ぷんぷん怒って、次郎を抱いて帰ってしまった。そして、それっきり、お民から何度使いをやっても顔を見せなかったばかりか、月々の飯米さえ受け取りに来ようとしなかった。で、とうとうお民の方が根負けして、自分でお浜の家に出かけることになった。

今度は、無論お猿の話なんか、どちらからも出なかった。それどころか、お民はこんなことを言って、お浜の機嫌をとったのである。

「この子は八月十五夜のちょうど月の出に生まれたんだよ。だから、きっと今に偉くなると思うわ。」

お浜は、それですっかり気をよくした。そして、それ以来、「八月十五夜の月の出」が、いつも二人の話の種になった。話の種になっても、それはちっとも不都合ではなかったのである。と言うのは、次郎の生まれた時刻は、実際そのとおりだったのだから。

もっとも、その時刻に生まれたことが、果して次郎にとって幸福であったかどうかは、疑わしい。それはおいおいと話していくうちにわかることである。

二　お玉杓子

次郎は、お浜の娘のお兼とお鶴とを相手に、地べたに蓆を敷いて、ままごと遊びをしている。場所は古ぼけた小学校の校庭だが、森閑として物音一つしない。周囲は、見渡すかぎり、黄金色の稲田である。午後の陽がぽかぽかと暖かい。

この光景は、次郎の心に、おりおり蘇ってくる、最も古い記憶の一つで、たぶん、彼の五歳頃のことだったろうと思われる。

お浜一家は、村の小学校の校番をしていた。老夫婦にお浜夫婦、それにお兼とお鶴、都合六人の家族が、教員室のすぐ隣の、うす暗い畳敷の部屋と、その次の板の間とを自分達の住み家にしていたのである。そしてそこへ割りこまされたのが次郎であった。

全体、恭一にせよ、次郎にせよ、なんでわざわざこんな家を選んで預けられたのかというと、それは、母のお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

民が、子供の教育について一かどの見識家だったからである。彼女は、槍一筋の武士の娘であった。そして幼いころから幾十回となく、孟母三遷の教えというものを聞かされて、それになみなみならぬ感激を覚えていた。で、自分に子供ができたら、機会をみつけてそれに似たようなことを実行してみたいと、かねて心に期していたのである。

こうした抱負をもった彼女にとって、お浜一家が学校の中に寝起きしているということが、大きな魅力にならないわけはなかった。この魅力の前には、校番の部屋が狭くて不潔であろうと、お浜本人が、以前三味線の門付けをしていた女であろうと、また、彼女の亭主の勘作がどこかの炭坑稼ぎにあぶれて、この村に流れこんで来た者であろうと、そんなことはまるで問題ではなかったのである。

そこで、三人の日向ぼっこの話にもどる。

次郎は蓆の中央に殿様のように座を占めて、お兼とお鶴とが、左右からつぎつぎにブリキの皿に盛って差し出す草の実や、砂饅頭に箸をつける真似をしていた。しかし、もう同じような遊びを小半時も続けていたので、少し厭きが来たところだった。厭きがくると、次郎はいつもお兼だけをのけ者にしてお鶴と二人きりで遊びたい気持になるのであった。お兼は恭一と同い年、お鶴は次郎と同い年で、これが次郎をして自然お兼よりもお鶴の方に親しませる理由だったらしい。が、同時に、色の黒い、藪睨みのお兼にくらべて、ふっくらした頬とくるくるした眼をもったお鶴の方が、より大きな魅力であったことも否みがたい事実であった。

ところで、次郎にとって、ここに一つの悲しむべきことがあった。それはお鶴のふっくらした左頬に、形も大きさも、お玉杓子そっくりなあざが一つくっついていたことである。次郎はいつもそれが気になって仕方がなかった。その日も、ままごとに厭くと、お兼にくるりと尻を向けてお鶴と差し向いになったが、その時、早速目についたのがそのお玉杓子であった。

お鶴は、次郎のそんな仕草にはちっとも気がつかないで、相変らず草の葉を刻んでは、せっせとそれをブリキ罐の中にためこんでいたが、永いこと陽に照らされて、ピンク色に染まったその頬の上に、鮮かに浮き出したお玉杓子が、次郎の眼には、いかにも血がかよって動いているように見えたのである。

次郎は変に心が落ちつかなくなった。そして、しばらくの間は、むずむずした気分で、それに見入っていた。そのうちに彼の右手の人差指がいつの間にかそろそろと伸びていって、こわいものにでも触れるように、そっとお鶴の頬をかすめたのである。

お鶴には、次郎が何でそんなことをするのかわからなかった。で、彼女は相変らずお玉杓子を頬にくっつけたまま、きょとんとして次郎の顔を見つめた。

お兼は、藪睨みの眼を一層藪睨みにして「ひっひっ」と次郎のうしろで笑った。

次郎は、その笑い声をきくと、何か非常に悪いことでもしたように思って、きまり悪くなった。ところで、男の子供というものは、きまり悪くなると、時として、妙に乱暴な気分になるものである。彼は急に立ち上って、あたりにあるままごと道具を、めちゃくちゃに足で蹴ちらしはじめた。

お兼がまた「ひっひっ」と笑った。

すると、次郎は何と思ったのか、今度はいきなりお鶴の方に飛びかかって行って、お玉杓子のくっついている頬をねじきるようにつねり上げたのである。

お鶴は火がつくように泣き出した。

「父っちゃん。」と、お兼は金切声をあげて、校番室の方へ走り出した。そして、それから一、二分の後には、次郎の両手は、勘作の木の根のような掌の中に、しっかりと握りしめられていたのである。

「何しやがるんだい、こいつ。」と、勘作の怒った声。

同時に、次郎の体は、乱暴に宙につり上げられた。手首と肩のつけ根とが無性に痛い。

次郎は、それでも、泣き声を立てなかった。彼は両足をばたばたさせながら、めちゃくちゃに勘作の下腹を蹴った。

「この餓鬼め。」

次郎は、いきなりうつ伏せに地べたに放り出された。掌と、唇と、鼻柱と、膝頭とが、その瞬間に、打ちくだかれたような痛みを覚えた。彼は四、五秒の間突っ伏したまま、身じろぎもしなかったが、次の瞬間には、地の底で鵞鳥が締め殺されるような泣き声を立てた。

お鶴も仰向けになってまだ泣いていたが、次郎の泣き声を聞くと、一層大きな声を出して泣いた。そしてそれから二人はせり合うように、代る代る泣き声をはり上げた。

勘作は突っ立ったままじっと次郎を睨めつけていた。

「どうしたんだね。」と、そこへお浜が掃除をしていたらしく、竹箒を持ったままやって来た。

「何だか知らねえが、こいつ、お鶴の頬ぺたを、ひどくつねっていやがったんでね。」

「それでお前さんは、坊ちゃんをなげとばしたとお言いなのかい。」

「そうだよ。」

「そうだよもないもんだ。たかが子供の喧嘩じゃないかね。仕事なしだとは言いながら、大の男が子供の喧嘩を

買って出るなんて、そんな話がどこの世界にあるもんか。」
「お浜、おめえ、自分の子がかわいくはねえのか、こんな目にあわされても。」
「何言ってるんだよ。ばかばかしい。かわいけりゃこそ、こうやって私の手一つで、育てているんじゃないかね。お前さんこそ、子供がかわいくないんだろう。毎日毎日ぶらぶらして、びた一文こさえて来るではなしさ。」
勘作はそっぽを向いて、黙ってしまった。
それまで、気のぬけた泣き声を出しながら、二人の言いあいに聞き耳を立てていた次郎は、どうやらお浜の方が優勢らしいのを知って、ほっとした。そして、もう一度お浜の同情を求めるために、大きな声を立てた。するとお鶴の方でも、それに負けないでわめき立てた。
「いつまでも泣くんじゃない。」
お浜は、お鶴をかろくたしなめてから、次郎の突っ伏しているそばにやって来た。
「次郎ちゃん、勘忍なさいね。」
お浜は、他の人に向かっては、次郎のことを「坊ちゃん」と呼ぶのだが、次郎本人に対しては、いつも「次郎ちゃん」と呼ぶことにしているのである。
「次郎ちゃんは、もう大きくなったんだから、お偉いでしょう。さあ、自分で起っきするんですよ。」
次郎は、しかし、お浜にそう言われて、足をばたばたさせながら、もう一度烈しくわめき立てた。すると、お浜は、うろたえたように、持っていた箒を地べたに置き、彼を抱き起こしにかかった。
「おやっ。」
次郎を抱き起こしたお浜は、土埃にまみれた彼の鼻と唇のあたりに、ほんの僅かではあったが、血がにじんでいるのを見つけたのである。
「お前さん、坊ちゃんのお顔に傷をつけたんだね。」
彼女は、きっとなって、もう一度勘作の方に向き直った。
勘作は、その時、お鶴の方を抱き起こして塵を払ってやっていたが、お浜の剣幕を見ると、そ知らぬ顔をして、さっさと校番室の方に歩き出した。
「お待ちっ。」
お浜はそう叫ぶと同時に、竹箒を取りあげて、うしろから思うさま勘作の頭をなぐりつけた。
「何しやがるんだい。」
勘作も、さすがに恐ろしい眼付をして向き直った。
「何も糞もあるもんか、大事な坊ちゃんの顔に傷をつけやがってさ。」
お浜は、まるで気が狂ったように、箒をふりまわして、勘作の顔といわず、手といわず、盲滅法に打ってか

かった。勘作は、突っ立ったまま、しばらく両手でそれを払いのけていたが、お浜の剣幕はますます烈しくなるばかりであった。

「ちえっ。」と、勘作は舌打ちをした。そして、くるりと向きをかえると、校庭の溝をとび越えて、畦道の方に逃げ出した。

「ぐうたらの、恩知らずめ。」

お浜はそう叫びながら、あとを追った。しかし、溝のところまで行くと、さすがにそれを飛びこしかねたらしく、そこに立ち止ったまま、いつまでも口ぎたなく勘作を罵っていた。

次郎とお鶴とは、ぽかんとしてこの光景に眼を見張った。

二人の目からは涙はもうすっかり乾いていたが、彼らの顔は、涙でねった土埃で真っ黒によごれていた。

お鶴の頬のお玉杓子もどうやら行方不明になっていた。同時に、次郎も、すっかりそれを忘れてしまっていたのである。

三　耳たぶ

ある夏の日暮である。次郎は直吉の肩車に乗って、校番の部屋から畦道に出た――直吉は二十二、三歳の青年で、次郎の実家の雇人である。今日はお民に言いつかって、次郎を迎えに来たのであった。

次郎は肩車が好きだった。このごろ勘作がいよいよ自分をかまいつけてくれなくなり、もう永いこと肩車に乗らなかったところへ、ひょっくり直吉がやって来て、お浜と何か二言三言囁きあったあと、肩車に乗せてやろうと言ったので、彼は大喜びだった。

校門を出て一町ほど北に行くと大きな沢がある。そこにはもう毎晩螢が飛んでいるころだ。次郎はよくそのことを知っている。だから、彼は肩車に乗って、そこに連れて行って貰うつもりだったのである。

ところが直吉は、校門を出ると、すぐ南の方角に歩き出した。この南の方角というのが、次郎にとっては、あまり好ましい方角ではなかったのだ。というのは、その方角に、彼の父母や、祖父母や、兄弟達が住んでいる家があったのだから。

お民は、孟母三遷の教えにヒントを得て、次郎を校番の家に預けはしたものの、彼がもの心づくにつれて、どうやらお浜に親しみすぎる傾向があり、それに、孟子の場合とちがって、学校というものの感化力が思ったほどでない、ということをだんだん知りはじめたので、この頃では、お浜が次郎を伴れてやって来るごとに、彼女を説きつけて、こっそり一人で帰って貰うことにしていたのである。

次郎にとって、それが大きな試練であったことはいうまでもない。彼はそんな時には、きまって、恐ろしい沈黙家になり、小食家になり、おまけに不安からくる寝小便をすらもらしたのであった。

彼にとっては、第一、家があまり広すぎた。狭っくるしい部屋の中で、むせるような生活をしなれて来た彼は、こんな広い家にはいると、急にすべての人間が自分から遠のいてしまうような気がして、妙な肌寒さを感じた。お浜がそばについている間ですらそうであったのに、まして、彼女がこっそり姿を消してしまったあとの頼りなさといったらなかったのである。

むろん、お浜が去ったあとでは、お民をはじめ、みんなで彼を取り巻いて、いろいろと言葉をかけてくれた。しかしそれらの言葉は、彼の耳には、学校の先生が教壇の上からものを言っているようにきこえて、何だか身がすくむようだった。とりわけお民の言葉にはそんな調子がひどかった。お民としてはそれはやむを得ないことだったかもしれない。というのは、彼女は、こんご次郎の悪癖を矯め、彼に上品な礼儀を教えこむという、母として重大な責務を負っていたのだから。

恭一は大して恐い兄とは思えなかった。しかし、その生白い顔と、いやにしとやかな動作とが、どうも次郎にしっくりしなかった。弟の俊三はまだ生まれて三年たらずではあったが、末っ子で、はじめから母の乳房で育ったためか、誰に対しても無遠慮な振舞いがあり、次郎の眼には、彼こそ第一の強敵のように映った。

祖父と父とは、遠くから冷やかに彼を眺めている、といったふうであった。祖母は馬鹿に彼にちやほやするかと思うと、すぐ突っけんどんになった。

こんなふうで、彼の実家はどんな角度から見ても、彼にとって愉快なものではなかった。で、彼がお浜に置き去りを食ったあと、沈黙家になり、小食家になり、寝小便をもらすのは余儀ない次第であった。いわばそれは彼の自衛本能ともいうべきものだったのである。そして、この本能の命令に従うことは、いつも事柄を次郎の有利なように展開させた。というのは、彼は結局、家中の者にもてあまされて、再びお浜の手に引き渡されることになったからである。

次郎は最近二十日あまりも寝小便もたらさないで、お浜の許に落ちついていた。そしてそろそろ実家の記憶もうすらぎかけたところであった。ところが、今日はだしぬけに、お浜と一緒ですら嫌いな方角に、大して親しみもない直吉によって、運び去られようとするのである。これは次郎にとっては、全く思いがけない出来事であった。

直吉の肩の上で、彼の小さな胸はどきどきし出した。

「いやあよ、いやあよ、あっちだい。」

彼は、彼の両手で、直吉の顔をうしろの方にねじ向けようとした。しかし、直吉の顔は、頑として南の方を向いたきりで、どうにもならなかった。どうにもならないどころか、直吉の足は、かえってそのために、一層速くなる傾向さえあった。

次郎はしくしく泣き出した。泣き出しても、直吉は一向平気らしかった。彼はずんずん南の方にあるくだけで、口一つ利こうとしない。次郎は泣きながらうしろを振りかえった。学校の建物が夕暮の光の中に、一歩一歩と遠ざかっていくのが、たまらなく淋しい。

こうなると、次郎はあきらめてしまうか、戦うか、二つに一つを選ばなければならなかった。彼は決然として後者を選んだ。——元来、次郎の勇気は学校との距離に反比例し、実家との距離に正比例することになっていたので、戦うならなるべく早い方が歩がよかったのである。

なお、彼が肩車に乗っていたことも、彼にとっては、有利な条件だった。それは、直吉の髪の毛や耳たぶを、自由に掴むことが出来たからである。しかも幸いなことには、直吉の髪の毛は相当長かった。彼は早速髪の毛をむしることにした。

「痛いっ。」

直吉は頓狂に叫んだ。しかし、彼の歩いて行く方向は、依然として変らない。従って、次郎の進む方向にも一向変化がないのである。

今度は思い切って耳たぶをつかんだ。少々すべっこくて、頼りない感じがする。次郎は総身の力をその小さな爪先にこめて、直吉の耳たぶをもみくちゃにした。

「ひいっ、畜生っ。」

直吉は悲鳴をあげた。同時に、今まで次郎の足にかけていた両手を思わず放してしまった。

とたんに次郎の体はうしろの方にぐらついた。次郎の十本の指は、直吉の耳たぶをつかんだままだったが、彼の体の重みを支えるには少し弱すぎたらしく、次の瞬間には、彼の体は、砂利で固まった路の上に、ほとんどまっさかさまに落っこちた。

彼は、後頭部と肩のあたりに花火が爆発したような震動を感じて、ぼうっとなった。しかし、この瞬間は彼にとって大事な一瞬であった。彼は毬が弾ねるように起き上った。そしてまっしぐらに学校の方に走り出した。

ものの半丁ばかりは、まるで夢中だった。しかし彼は、直吉が追っかけて来るかどうかを確かめずにはおれない気がした。で、走りながら、ちょっとうしろをふり向いた。すると直吉は、両手で耳たぶを押さえながら、うらめしそうにこちらをにらんで立っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo